



## 寄稿

# 1 世界の被災地で 見た人間模様



共同通信社 和歌山支局長

名波 正晴

昨年10月1日付で和歌山に着任した。記者として初場所を大阪支社で迎え以来計8年間、私は関西にどっぷりと漬かった。その後の神戸支局では阪神淡路大震災の激震に全身を揺さぶられ、被災者でありながら同時に取材者として未曾有の現場を歩いた。その後、海外特派員として駆け巡った先の南半球でも不思議と自然災害と縁があり、言葉や暮らし向きは違えど、大自然の摂理に翻弄された人々にインタビューする機会も多かった。関西は私の記者としての原点であり、足腰を鍛えられた修行場でもあった。その地にほぼ20年ぶりに舞い戻った。この間、2011年3月の東日本大震災を経て、当地では南海トラフ巨大地震への備えが着々と進んでいる。マグニチュード(M)9級ともいわれる大地と海原の鳴動と叫喚。やがて訪れるであろう天災を思い浮かべながら、私が海外で見た被災地の人間模様を紹介したい。

### ■最貧国

2010年1月12日夕、カリブ海の島国ハイチの首都ポルトープランスはM7.0の大地震に見舞われ、白亜の尖塔を載せた大統領府や政府庁舎をはじめ、ビルや民家は崩れ落ち、町全体が不気味な土煙に覆われた。政府によると、31万6千人以上が死亡、300万人が被災し、死者は人口の3%、被災者は実に30%を占めた。東北の三陸沿岸を襲った東日本大震災による死者・行方不明者は日本の人口の0.014%。ハイチの数字がカリブ海の小国に壊滅的な被害をもたらしたことは想像に難くない。

世界最初の黒人共和国に中南米初の独立国一。ハイチは輝かしい歴史を持つ一方、1804年の独立以来、政治的な内紛とクーデターに明け暮れ、被災前は人口の約6割が1日の収入1.25ドル(約150円)以下という中南米の最貧国だった。住環境よりもその日の食い扶持が何事にも優先した。貧困は自然災害など非常事態時に「命の不平等さ」をたちまち



露見させ、これが被害を拡大させた最も大きな要因だった。

当時、ブラジル・リオデジャネイロ支局にいた私は、地震発生からほどなく現地に向かった。冬の北半球とはいえ、首都の日中の最高気温はときに30度を超えた。救助隊の手に負えない無数の遺体が街角に放置され、カリブ海の肌を刺す日差しの下、強烈な死臭が鼻腔の奥を突いた。救援物資の到着が遅れたこともあって、怒りと空腹に支配された人々は、雑貨店のシャッターを力づくでこじ開け、棚の商品を競い合うように奪い、鬱憤を晴らすかのように火を放った。略奪は燎原の火のごとく各地に広がり、生きるという人間の本能をまざまざと見せつけた。

### ■ 「奇跡の子」

私は首都を後にし、路面が深くひび割れた悪路を車で約3時間、南部の観光都市ジャクメルに向かった。18世紀の植民地時代の面影を残す街では、バルコニーが付いたカラフルな家屋が所々でひしゃげていた。中心街に近い一角、コンクリート建ての2階が崩れて1階部分を押しつぶした民家があった。地震から7日ぶりに救出された生後約3週間の赤ん坊、エリザベト・ジョアサンは、ここにいた。

その日、母親のミシェレン（22）が授乳し、1階奥のベッドに寝かしつけた直後、軒先で上



ハイチ大地震から1週間後に見つかった女兒と母親  
= 2010年1月

下に激しい揺れを感じた。目の前の家が倒れ、振り向くと自宅も沈んでいた。「娘はもう駄目だ」。悲嘆に暮れた1週間後、フランスなどの救助隊が救出。隊員は「天井が斜めに落ちたため、ベッドとの間に約20センチのすき間ができ、そこにいた。けがはなく元気だった」と話した。真っ白な土ぼこりをかぶり、ややほおがこけたわが子に「生きてくれた。信じられない」。授乳すると、大きな声で泣いた。

シーツを屋根代わりに張ったテントで千人以上が避難生活を送るジャクメルのペシナ地区を訪れた。自宅が全壊した主婦バジヨ・クリスマブ（49）は、赤ん坊救出の一報に地震で即

死した末娘（13）の面影をダブらせた。自宅から遺体を収容できたのは3日後、傷みが激しく川の近くに埋めて弔った。悲しみに救済物資にも手を付けられなかったが「神が赤ん坊を守ってくれた。私たちは見捨てられていない」と励まされた。

「誰もが赤ん坊は死んだと思った中で、奇跡的に生きていた。大打撃を受けた町もきっと再生できるはずだ」と地元警察幹部。「奇跡の子」のあどけない笑顔が、ささくれた被災者の心に小さな明かりをともした。



地震で倒壊したハイチ大統領府 = 2010年2月



ハイチ大地震の犠牲者追悼ミサで祈る人々  
= 2010年2月（写真家・佐藤文則氏撮影）

## ■津波に呑まれた島

ハイチ大地震から約1カ月半後の10年2月27日未明、南米チリは地鳴りを伴うM8・8の地殻の巨大な変動に見舞われた。直後に中部の軍港タルカワノなどで波の高さが2メートルを超える津波があり、死者は全土で500人以上。身元が確認されたのは280人程度で、多

くが津波で流されたとみられる。この年にはチリ北部で鉱山の落盤事故が発生、作業員33人が地下630メートルの坑道に閉じ込められ、69日後に全員がカプセルで救助、生還するという奇跡の救出劇が繰り広げられた。中南米は一つの歴史的な転換点にあった。

本土から西へ約600キロ離れた太平洋のファン・フェルナンデス諸島もその一つだった。首都サンティアゴから軽飛行機で約3時間、モアイ像が居並ぶイースター島の陰に隠れて存在感に乏しいこの孤島群には、ロビンソン・クルーソーという名の島がある。英小説家ダニエル・デフォーの名作「ロビンソン・クルーソー」は、この島で漂流生活を送った実在の船員がモデルで、島の名前も小説に由来する。

地震直後、漆黒の海は引き波になるたびにゆっくりと水位を上げ、高さ20メートルの水の壁となって沿岸をなめつくした。波は海岸線から平均300メートルに達し、町役場や学校をたちまち呑み込んだ。私は地震から約3カ月後、復興を歩む島を訪れたが、特産のロブスター漁の漁船で賑わった港町は、爆弾を投下されて焼失したように人家が一軒もなく、栈橋だけがかろうじて残る無人の町だった。一面が波に流された中心街には幽鬼が漂っていた。

島の漁師アルド・ラカバレン（25）はパーティーのため訪れた高台の友人宅にいた。大地震があったその日、町には半鐘を打ち鳴らす音が響きわたった。本土から遠く離れた孤島で揺



津波で陸に打ち上げられた漁船  
= 2010年3月、チリ中部タルカワノ

れはほとんど感じられず、火事と思い自宅に戻る途中、樹木をなぎ倒す破壊音がとどろき、高波が押し寄せた。数時間後、数百メートル離れた入り江の隅に自宅の屋根と祖父（72）の遺体が浮いていた。

### ■半鐘打ちの少女

島民約800人のうち約3分の1が家を失う壊滅的な被害を受けた一方で、死者・行方不明者は16人とどまった。本土の津波警報が混乱して届かない中、海の異変に気付いた少女がいた。中学生マルティナ・マトゥラナ（12）だった。沿岸部の家から港を眺めていると、海面は生き物のように急速に成長した。警官の父親とともに家族そろって避難途中、マルティナは通り掛かった広場で仁王立ちになって半鐘を連打した。約30秒間。けたたましい鐘の音で目を覚ました数十人が間一髪で難を逃れた。以来、身長152センチの少女は「英雄」とたたえられた。「稲むらの火」を彷彿とさせるエピソードだ。

島には火災や土砂崩れなどの非常警報として半鐘を鳴らす習わしがあった。マルティナは地震に先立つ約3年前、父の転勤で本土から島に引っ越し、一度、その光景を見たことがあった。



半鐘を打ち鳴らし人々を救ったマルティナ  
= 2010年5月



犠牲になった娘を悼む家族  
= 2010年5月、チリのロビンソン・クルーソー島

それを無意識のうちに再現した。「早く知らせようと無我夢中だったの。頭の中は真っ白だった」。津波で失った家の跡地には、コンクリートの土台だけが残った。父親はパトロールの途中に立ち寄り、割れた食器など家族の思い出の品を掘り返していた。

マルティナには津波の後、取材が殺到し、本土に招かれテレビ番組にも出演した。母親（34）は、娘が「英雄」と騒がれることで「自分を勘違いするのではないかと心配していた。とりわけ、謝礼金を支払う代わりにインタビューをとる要請が後を絶えず、うんざりしたという。

「娘がやったことは人助け、それだけのこと。娘の行動や教訓は社会に還元されるべきもので、お金をいただくものではない」

### ■無償の奉仕

災害の現場には、倒壊した建物のがれきの中に潜り込み、燃えさかる炎もいとわず、負傷者の救助に当たる消防士の姿も多くあった。チリでは、現場で働く消防士全員が無報酬のボランティアだ。世界でもたぐいまれな消防組織、運

営システムは150年以上の歴史を持つ。

チリ大地震後、中部の被災地コンセプションで出会った消防署第1分署のフランシスコ・パルマ(21)は、運動学を専攻する大学生。週の大半を署内で寝泊まりして過ごす。この町では地震の揺れにより、15階建ての新築マンションが1階の根元部分から折れ曲がり、仰向けに倒れて真っ二つに割れていた。その日、部屋に取り残された母親の救出を泣きながら求める女性の姿があった。現場に駆け付けたパルマは窓ガラスを破り、ベッドや家具がひっくり返った寝室に入り込み、約1時間後、暗闇の中から男女7人を救った。「助けてくれて、ありがとう」。脱力した老婆が言葉をつないだ。パルマには万感の思いが突き上げた。

ボランティア消防士の源流は、首都の西約100キロに位置する太平洋岸の港湾都市バルパライソにある。1851年、この港町にチリ最初の消防組織が生まれた。パナマ運河が開通する前の1800年代、バルパライソは米国の西海岸と欧州などを結ぶ航路の重要な中継寄港地だった。1850年の暮れ、碁盤目状の町の倉庫から火の手が上がり、一昼夜で町の半分以上が焼け落ちた。当時、消防組織はなく、これを教訓に翌年、151人の貿易商人が自警消防隊を結成。町を仕切っていたのは貿易商人で、自分の財産を守るためなら、無報酬は当然との発想だった。



倒壊したマンションで続く救助活動  
= 2010年3月、中部コンセプション



被災地を視察する国連の潘基文事務総長(当時)  
= 2010年3月



略奪後に放火されたスーパーで消火する消防士  
= 2010年3月、中部コンセプション

## ■正義感

それから150年以上たったいまも、340以上の全自治体がこれをモデルにボランティアの消防団を運営、全国千以上の消防署で計3万5千人以上が無償で働く。各消防本部のトップなどごく少数が行政職を兼ねる。男女を問わず18歳以上であれば年齢制限はなく、親子二代や女性の消防士も目立ち、若者の応募は絶えない。消防幹部は「活動の中身はシロウトではない、プロそのものだ。時代は変われども、若者は善行の機会に飢えている」と話した。

コンセプションの大学生のパルマに消防士の魅力は何かと聞いたところ、即座にこんな言葉が返ってきた。

「人助けがたまらない。あの達成感がしびれる」  
素朴な正義感がこの地に脈々と受け継がれていた。  
(敬称略、年齢は取材当時)